

考古学から見た箱館戦争

石井 淳平（箱館戦争戦跡調査プロジェクト）

はじめに

北海道南西部には明治元年（1868）から同2年に新政府軍と旧幕府軍の間で行われた箱館戦争の戦跡が残されている。これらの戦跡は広範囲に構築された「胸壁」や塹壕によって構成された野戦築城の一種である。筆者らは、これまで北斗市二股台場、函館市川汲台場、七飯町峠下台場の調査を通じてこれらの戦跡の遺構把握と防衛構想を明らかにしてきた。本報告ではこれらの調査成果を総括するとともに、箱館戦争を通じて獲得した軍事技術の実態について言及したい。

1. 南北海道における19世紀の城郭遺構

幕末維新期には本稿で主として取り上げる臨時的な野戦築城の他に、松前藩や幕府、東北諸藩によって築かれた城郭、陣屋、台場も多い。南北海道に現存するものだけでも、南部藩砂原陣屋（森町）、五稜郭跡・四稜郭跡（函館市）、戸切地陣屋（北斗市）、福山城跡（松前町）・館城跡（厚沢部町）などがある。これらのほかに、臨時的な築城やすでに消失した遺跡、伝承のみの台場、明確な遺構が確認されていない古戦場がある（西山2017）。これらの遺跡は19世紀に入り蝦夷地沿岸部の海防や蝦夷地統治形態の転換が進む中で様々な築城主体によって構築されたものである。これらのいくつかは、箱館戦争で使用されることとなった。

2. 箱館戦争と関連遺跡

（1）明治元年箱館戦争の経過

大山柏（1968: 677-846）の網羅的な研究により戦闘経過を概観する。

明治元年（1868）鷲ノ木（現森町）に榎本武揚率いる旧幕府軍が上陸する。旧幕府軍は海沿いに南下し川汲峠を越える部隊と、大沼沿いに南下し峠下（現七飯町）を抜ける部隊の2方面から箱館を目ざした。七飯峠下や大野一の渡で箱館府兵ほか諸藩との小規模な戦闘が生じたが、いずれも旧幕府軍はこれを排除し、26日に五稜郭を占領した。

五稜郭占領により、新政府側の兵力は松前藩のみとなった。10月27日、土方歳三率いる約700名が松前城攻略のため出陣する。松前藩は一ノ渡・福島峠（現福島町）、吉岡（現松前町）などに陣地を構築していたが、目立った抗戦はなく、松前城に撤収したとされる。

旧幕府軍による松前城攻撃は11月5日に開始された。これに先立ち、11月1日には旧幕府軍艦播龍が松前城への艦砲射撃を行っている。松前藩は城内で装填した野戦砲を開門と同時に発射し、再び城内に引き込んで

装填する射撃を繰り返したとされる。しかし、旧幕府軍が開門と同時に小銃の斉射を行ったため、松前藩は備砲を捨て、開門したまま撤退した。これにより旧幕府軍は城内に突入できたという。こうして松前城は落城した。

一方、松前藩主徳広は、旧幕府軍の松前城攻撃開始前の10月28日に脱出し、新たに築城された館城（現厚沢部町字城丘）へ移動していた。五稜郭からは館城攻略のため松岡四郎次郎率いる幕府一聯隊が出陣し、11月12日に稲倉石で待ち受ける松前藩の防御陣地を突破し、11月15日に館城攻撃を行った。館城は1日の戦闘で落城した。

旧幕府軍の主力は江差を目指し海岸線を北上し、大滝（現上ノ国町）で松前藩と交戦した。大滝の戦闘の日付ははっきりしないが、大山は11月13日を想定している。この戦闘は旧幕府軍の勝利に終わり、松前藩は北方の江差方面へ撤退した。また、藩主徳広は幕府一聯隊の攻撃直前に館城を離れ、熊石関内から津軽へ避難している。藩主の津軽脱出により、松前藩の組織的な抵抗は終了する。

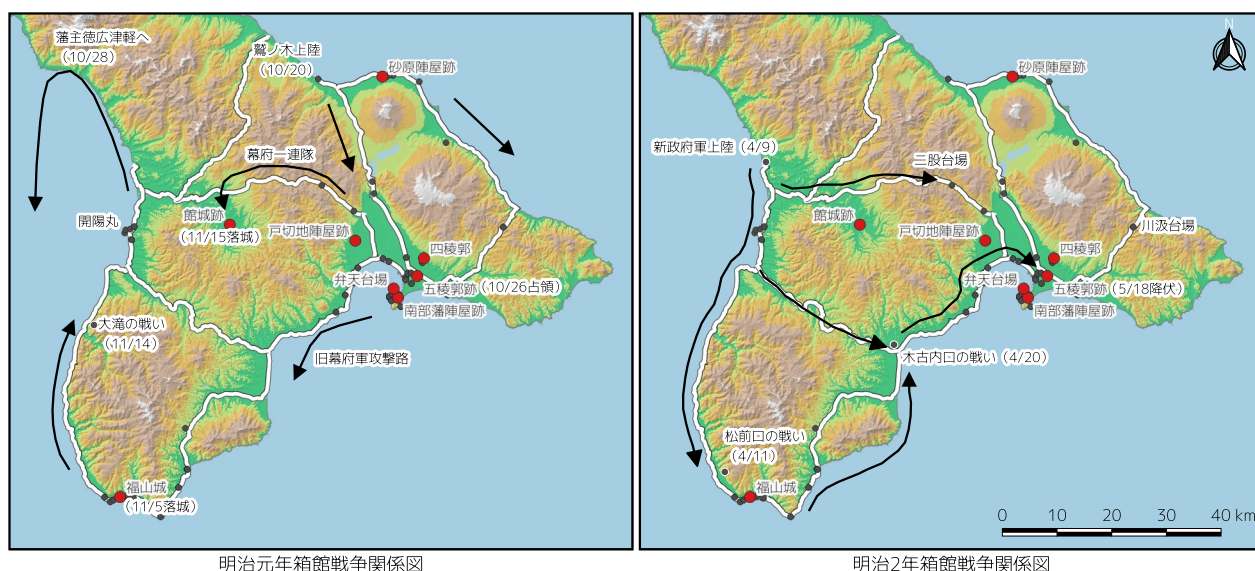


図1 箱館戦争と関係遺跡

(2) 明治2年箱館戦争の経過

明治2年（1869年）を迎えると、新政府軍は本格的な攻勢作戦を開始した。旧幕府軍も五稜郭の修築や新政府軍の進路に台場を築いて準備を整えていた。

新政府軍の攻勢作戦は3つの梯団の上陸によって行われ、4月9日、第1梯団約1,000名が音部に上陸した。新政府軍は松前口と厚沢部口の2つの進路を設定し、主力を松前口に置き、海沿いに江差～松前城～箱館を目指すルートを設定した。厚沢部口は明治元年の幕府一聯隊の進路をほぼ逆行するもので、厚沢部川を遡行し、大野から箱館を目指す進路である。

江差を守備する旧幕府軍は江差の防衛は困難と判断し撤退したため、新政府軍は上陸の同日に江差をほぼ無血で占領した。江差を占領した新政府軍は新たに木古内口を設け、松前城攻略の主力とは別の部隊を木古内へ向けて出撃させた。松前口における新政府軍は根部田・赤神（現松前町）で旧幕府軍と交戦し、一時は敗走す

る場面もあったが、第二梯団上陸による補充を受け、18日に松前城を攻撃しこれを奪還した。

木古内口では4月12日から20日にかけて延べ3度の戦闘が行われた。木古内攻防戦には旧幕府海軍播龍からの艦砲射撃も加わり、一進一退の攻防が続けられたが、五稜郭からの指令により、旧幕府軍は木古内守備を放棄し、茂辺地方面（現北斗市）に後退した。

厚沢部口では土方歳三率いる旧幕府軍が台場山周辺に陣地を構築し、新政府軍を待ち受けており、4月30日の撤退までここを守り抜いた。二股台場の攻防戦については後述する。

4月29日、新政府軍は茂辺地方面の旧幕府軍への攻撃を開始した。これには海上から朝陽、甲鉄2艦からの艦砲の援護が加わった。艦載大口径砲の威力は絶大で、旧幕府軍は敗走を続けた。5月1日までに新政府軍は一挙に函館平野まで進出した。

五稜郭への攻撃は5月11日から開始され、孤立した弁天台場が5月15日に降伏した。5月16日には五稜郭の南西に位置する津軽藩陣屋も陥落した。このような戦況により、五稜郭に立てこもった旧幕府軍は5月18日に降伏した。

3. 北斗市二股台場

(1) 二股台場の概要

明治2年4月9日、占領されていた蝦夷地を奪還するため、新政府軍は北海道南西部の乙部に上陸した。新政府軍は攻撃ルートとして松前口、二股口、安野呂口の3つを設定し、南蝦夷地の要衝である江差、松前を経て箱館へ至る松前口と、松前口から分岐する木古内口に最大の兵力を割いた。二股口には松前口に次ぐ兵力が派遣された。二股口は険しい山道を進軍する必要があったが、強固な防御拠点がなかったため、兵力に乏しい旧幕府軍を分断し、個別に撃破することを狙ったと考えられる。

(2) 二股台場の位置と地形

二股台場は北斗市大野町市街地の北西約10kmに位置し、大野川左岸、大野川とその支流である二股沢川の合流点付近にある（図2）。大野市街地から二股沢川付近までは大野川に沿って平坦な地形が続くが、二股台場より上流では、尾根と谷が交互に現れる急峻な地形が広がる。二股台場塹壕群は標高261mの台場山と、これと連なる339m峰の尾根上に確認されており、二股沢川と並行して北方から大野川へと傾斜する尾根上に塹壕群が並んでいる。最高地点に立地する塹壕（F15）は標高約330m、最低地点に立地する塹壕（F16）は約200mである。尾根の鞍部を旧道である「鶉山道」が横切っており、鞍部を挟んで塹壕群が南北に分かれている。

新政府軍の攻撃正面となった尾根の西側斜面は、鶉山道南側では平均傾斜約20度、鶉山道北側では約30度である。

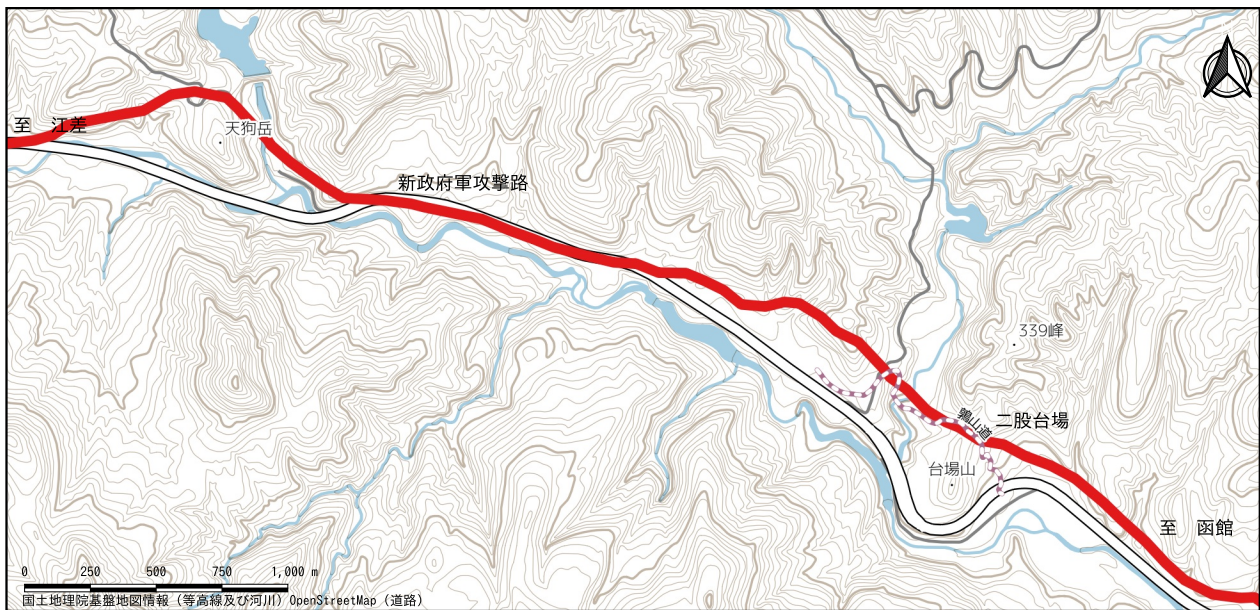


図2 二股台場周辺地形図

(3) 二股台場の戦闘経過

二股台場の戦闘は、4月13日から14日にかけて行われた第一次会戦と、兵力を増強した両軍による4月23日から25日の第二次会戦の2回に分けられる。

第一次会戦は、二股台場から約3km西方の天狗岳前哨陣地を新政府軍が攻撃したことにより始まり、ただちに二股台場をめぐる攻防へと転じた。戦闘は13日夕刻から夜通し続き、翌14日早朝、新政府軍は撤退した。第一次会戦時の旧幕府軍の戦力は約130名、新政府軍は600名以内と推測される。

第二次会戦は、双方とも兵力を増強し、4月23日夕方から新政府軍の攻撃により開始された。旧幕府軍の兵力は戦闘開始後の増援も含めて最大400名、新政府軍は1,000名と推測される。新政府軍は旧幕府軍の3倍近い兵力を投入していたが、逐次投入となったため、常時二股台場と対峙した兵力は600名程度にとどまった。この間、旧幕府軍の増援部隊（伝習士官隊）が突撃し、新政府軍が敗走する場面や、二股台場陣地の一角が新政府軍に占領されかけるなど、一進一退の攻防が続いたが、両軍とも致命的な打撃を与えられないまま、4月26日早朝に新政府軍が撤退し、第二次会戦は終了した。

その後、二股台場をめぐる大規模な戦闘は発生せず、4月29日の矢不來での敗戦の報が二股台場にもたらされたため、旧幕府軍は二股台場が戦略的価値を失ったと判断し、4月30日早暁、五稜郭へ撤退した。

(4) 二股台場の塹壕配置と区分

塹壕群は二股沢川と平行に南北に延びる台場山と339m峰間の尾根上に位置する（河野1924: 88-91; 毛利2012; 石井ほか2020）。二股沢川の河岸から尾根の頂部までは約200mの直線距離がある。鶺鴒山道北側では、尾根の西面は40度を超える急傾斜であるため、直接の登攀は困難である。一方、鶺鴒山道南側では、尾根の西面は急な場所でも25度前後であり、容易に登攀できる。

塹壕群は配置と指向する方向（主に土塁を設ける方向）によって4群に区分した（図3）。

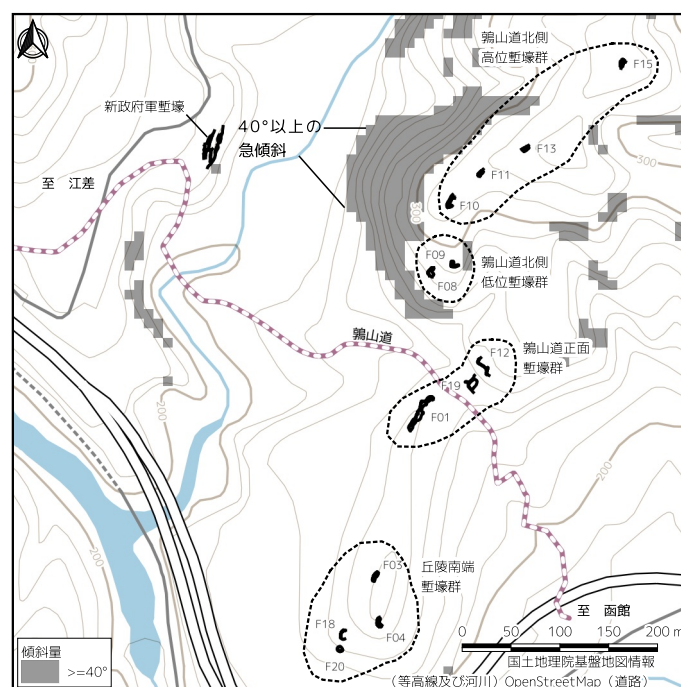


図3 二股台場の塹壕配置と地形

(5) 塹壕の区分

鶉山道正面塹壕群

新政府軍の攻撃路にあたる鶉山道正面に位置するため、複雑で大規模な塹壕が形成されている。F01は「稲妻形塹壕」として知られるものであり、F19は長方形の縦穴であることから、他の塹壕と異なり内部に建物が設置されていた可能性もある。F12はF19の山側直上の平坦面に位置し、F19を支援しつつF01とともに鶉山道に対して抑止力を持っていたと考えられる。

丘陵南端塹壕群

丘陵南端塹壕群を構成する塹壕のうち、F03、F04は尾根上に位置し、高所を占める。F04はF18及びF20を俯瞰できる位置にあることから、F04を支援するために陣地を前進させ、F18及びF20が構築されたと推測される。F18とF20は隣接して構築されており、直接連絡が取れる距離にある。戦闘時には最高所のF04から広域の戦況を把握し、F18、F20を前進陣地として3つの塹壕が連携して機能したものと推測される。

鶉山道北側低位塹壕群

この塹壕群が所在する鶉山道北側尾根は、鶉山道正面塹壕群の手前に張り出すように位置している。塹壕群の西側及び南側斜面は40度以上の急傾斜となっており、この方向からの攻略はほぼ不可能である。この塹壕

群は二股沢川方面からの攻撃に対する優位を確保しつつ、鶺山道正面塹壕群及び鶺山道南側塹壕群を攻略する敵を側射する位置を選地したものと考えられる。

鶺山道北側高位塹壕群

この塹壕群は鶺山道北側の高位の尾根上に位置する。土塁の構築方向は二股川方面である。この位置から鶺山道は視認できず、鶺山道低位塹壕群やその他の塹壕群と直接支援できる位置関係にはない。この塹壕群は、二股川対岸の敵の動きを牽制し、二股川上流を迂回しようとする動きを妨害する目的で構築されたと推測される。後述するように、二股川対岸に設けられた新政府軍塹壕は、この高位塹壕群の脅威を緩和し、渡渉点へ向かう新政府軍を援護する目的で構築されたと考えられる。

(6) 可視領域による分析

塹壕群の可視領域とその特徴

可視領域¹⁾から読み解く塹壕群の特徴は次のとおりである（図4）。

1. 鶺山道正面塹壕群は、鶺山道上の視界が重複し、一部は鶺山道南側丘陵西側の緩斜面にも視界が及ぶ。
2. 丘陵南端塹壕群は、南西方向に広がる丘陵先端部と鶺山道南側尾根の西面に広く視界が届く。
3. 鶺山道北側低位塹壕群は、鶺山道および鶺山道南側丘陵の西面に対して広範な視界を持つ。
4. 鶺山道北側高位塹壕群は、鶺山道にはほとんど視界が通らず、鶺山道南側丘陵の一部、特に尾根頂部に視界が及ぶ。主な可視領域は二股沢川対岸である。

考察

丘陵南端塹壕群は攻撃正面と想定される鶺山道や鶺山道南側丘陵西面に視界が効かず、丘陵の南西部に可視領域が集中することから、これらの塹壕は、二股台場を大野川に沿って南側から迂回されることを阻止する機能を担ったと推測する。

鶺山道南側塹壕群は現時点ではF03しか確認されていないため断定は避けたいが、二股沢川方向に広く視界が効き、一部鶺山道も可視領域に含まれることから、丘陵西面の緩斜面からの攻撃に備えることを主目的とし、鶺山道を側射する機能も併せもつと推測する。

鶺山道正面塹壕群は、3つの塹壕の可視領域が鶺山道上で重複することから、鶺山道を侵攻する敵を正面から封殺することがその主たる機能と推測する。また、鶺山道南側丘陵西面にも一部視界が効くことから、丘陵南側の西面を側射する機能もあったと推測する。

鶺山道北側低位塹壕群は鶺山道と鶺山道南側丘陵西面全域に視界が効くことから、鶺山道とその南側の西斜面に対して側射することが主な機能と推測する。

鶺山道高位塹壕群は主戦場となる鶺山道や鶺山道南側丘陵西面には視界が効かず、主に二股沢川対岸に視界が効くことから、これらの塹壕群二股沢川対岸の新政府軍陣地での活動や北側からの迂回を抑止・牽制することが主な機能と推測する。

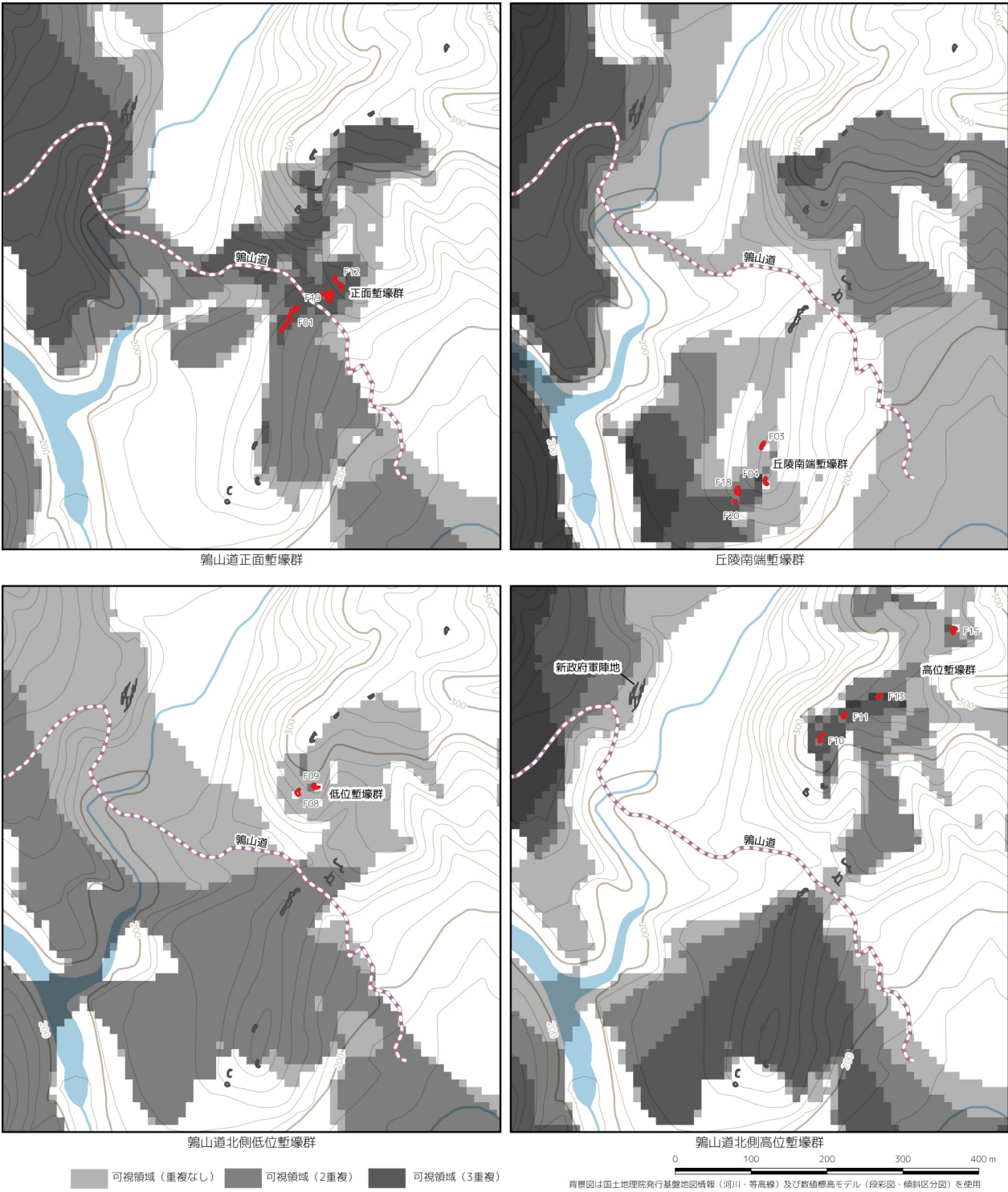


図 4 二股台場壙群の可視領域

(7) 二股台場まとめ

二股台場の立地的特徴

函館側から見ると、二股台場は急峻な山道の起点に位置し、江差側から見ると、二股台場は長い山道の終点に位置する。この地理的環境は、旧幕府軍にとって補給線の負担を軽減しつつ、新政府軍には最大限の負担を強いるものとなっている。

第一次会戦の後、新政府軍は厚沢部の稲倉石まで撤退を余儀なくされたが、二股台場から稲倉石までは現在の国道 227 号に沿っても、山中を 14km 以上進まねばならない。一方、旧幕府軍の補給拠点と考えられる市渡村（現北斗市一渡）から二股台場までは、約 10km の平坦な補給線が続いており、両軍の補給状況には大きな差があったと推測される。新政府側の記録にも「雨は降し非常な困難で、食料も来ない」、「度々稲倉市（「稲倉石」：執筆者註）まで休養の為に戻らなければならぬので不便でいけません」（児玉恕忠「函館役」）とあり、補給に困難をきたしていた様子がうかがえる。

塹壕配置からみる旧幕府軍の防衛構想（図 5）

二股台場は鶉山道とその南側尾根において傾斜が緩やかであり、地形的には攻略が比較的容易である。一方、鶉山道北側尾根の西面は、岩肌が露出する箇所を含む 40 度以上の急傾斜となっている。このため、二股沢川方面から直接的に鶉山道北側尾根を攻略することは困難である。旧幕府軍は、この北側尾根に塹壕を配置し、防御正面となる鶉山道や鶉山道南側の緩斜面を側射できるようにしていた。

鶉山道を封鎖する鶉山道正面塹壕群を開口部とみると、その前面に張り出す北側尾根は「食い違い虎口」のような位置関係を形成しており、鶉山道正面塹壕群に接近する敵を側面または背面から攻撃することが可能となっている。このように、自然地形の活用が二股台場を構成する重要な要素であったと考えられる。

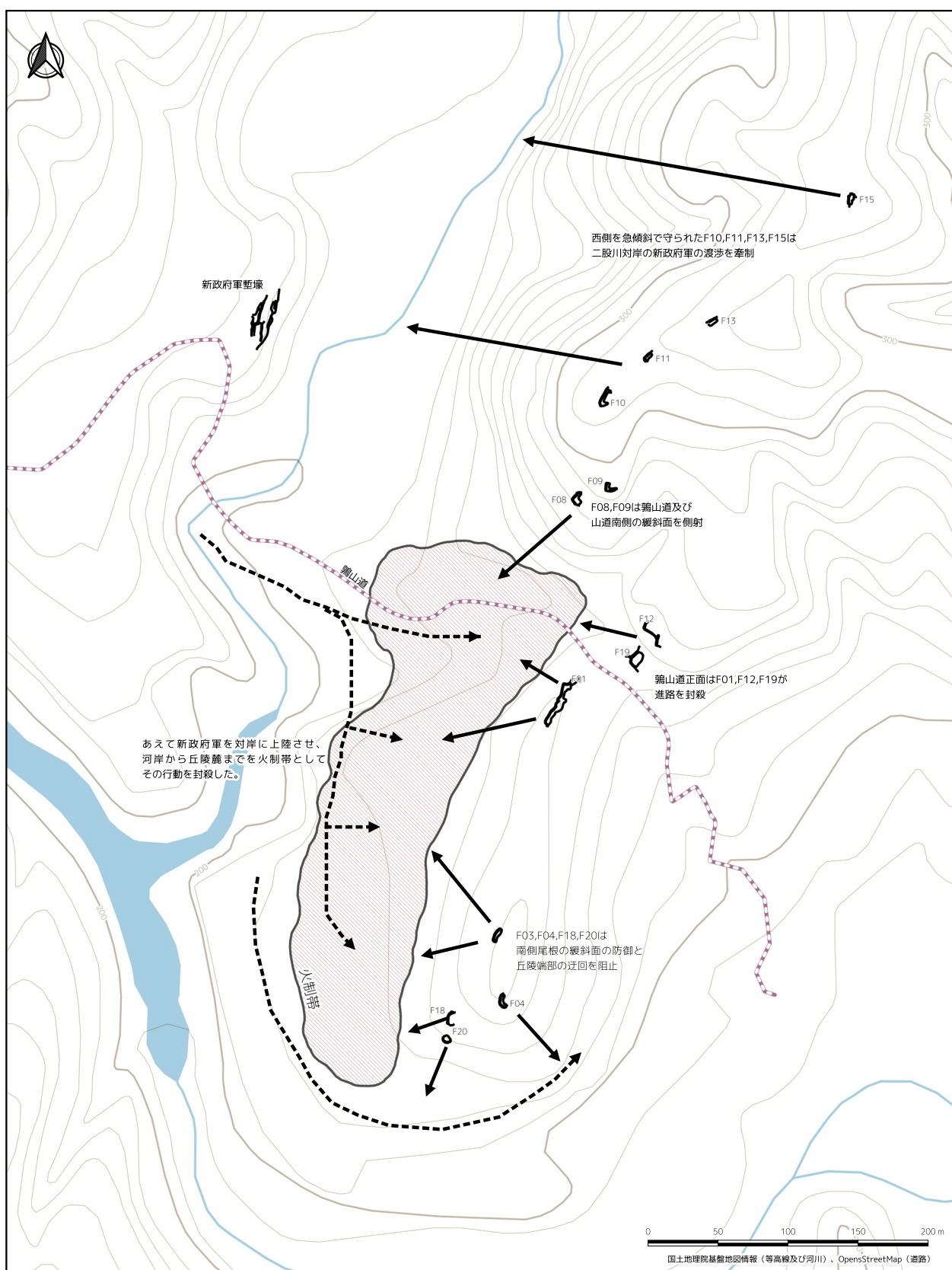


図5 二股台場防衛構想模式図

4. 函館市川汲台場

(1) 川汲台場の概要

明治元年の戦闘記録

川汲台場周辺で確認できる戦闘記録は、明治元年に砂原経由で川汲峠を越えた土方隊（「陸軍隊」、「額兵隊」など約 500 名）と箱館府兵によるものである。大鳥圭介の『南柯紀行』（大鳥 1998: 72）によれば、土方歳三が率いる陸軍隊と額兵隊が川汲峠へ向かい、川汲村の温泉から山に上がった際に 1 小隊ほどの敵兵がいたが、特に戦闘もなく敵は撤退したため、追撃して川汲峠を占領し、そのまま箱館側の湯の川まで下ったと記されている。川汲峠を守備していた箱館府兵が土方隊と交戦せずに撤退した記録は、『蝦夷之夢』（今井 1998: 190）にもみられる。今井の記録によれば、箱館府兵は川汲峠の峻険さに依存して、ただ焚き火を囲んでいるだけであり、旧幕府軍の接近にも気づかなかったため、一撃で潰走したと記されている。すなわち、明治元年時点で、川汲台場周辺に築城が行われた形跡はみられない。

明治 2 年の記録

新政府軍による蝦夷地奪還作戦に備え、旧幕府軍は各所に防御陣地を準備した。4 月 5 日、新政府軍艦 5 隻が青森港を出港し、箱館山の後方へ回った際に、鷲ノ木や川汲に通報されていたことから（大鳥 1998: 83）、鷲ノ木や川汲には旧幕府軍の部隊が配置されていたことがわかる。陣地構築に関しては、『北国戦争概略衝鋒隊之記』（今井 1988: 178）や『函館戦記』（須藤編 1996: 288）に記されており、川汲には 5 基の砲台が築かれ、今井信郎が中隊を率いて守備にあたったとされている。また、『函館戦記』には、衝鋒隊（隊長は今井信郎）が鷲ノ木から川汲に至る太平洋側の守備についたことが記されている。

(2) 川汲台場の位置と地形

川汲台場は函館市湯川町と同市川汲町を結ぶ川汲峠周辺の尾根に位置する（図 6）。この尾根は、汐泊川上流に位置し、津軽海峡と太平洋の分水嶺を形成している。尾根の鞍部には旧川汲山道が通り、この鞍部を南北に挟むように塹壕群が配置されている（河野 1924: 61-62; 小林 1967: 32-33）。

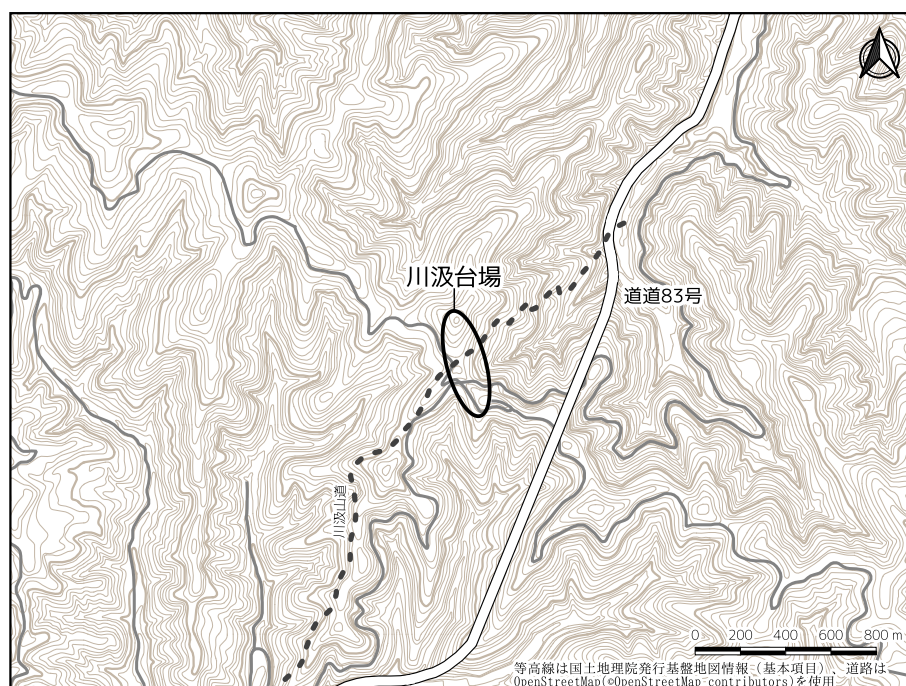


図6 川汲峠と川汲台場

(3) 塹壕配置と概要

川汲山道を挟む尾根上では12基の塹壕が確認されている(図7)。

これらの塹壕のうち、川汲山道の北側に位置する台場山山頂にはK01が存在し、台場山山頂から川汲山道にかけての尾根にはK02からK06の5基が配置されている。また、川汲山道を挟む位置にあるK07とK08の2基の塹壕は、いずれも長さが25mを超える長大な塹壕である。川汲山道の南側尾根には、K09からK11の3基の塹壕が存在する。南側尾根の最高地点であるK11の南東には尾根が続いているが、NHKの電波塔が建設されているため、塹壕の有無は確認できていない。さらに、台場山山頂から川汲山道とは反対の北側に下った地点にK12が位置する。

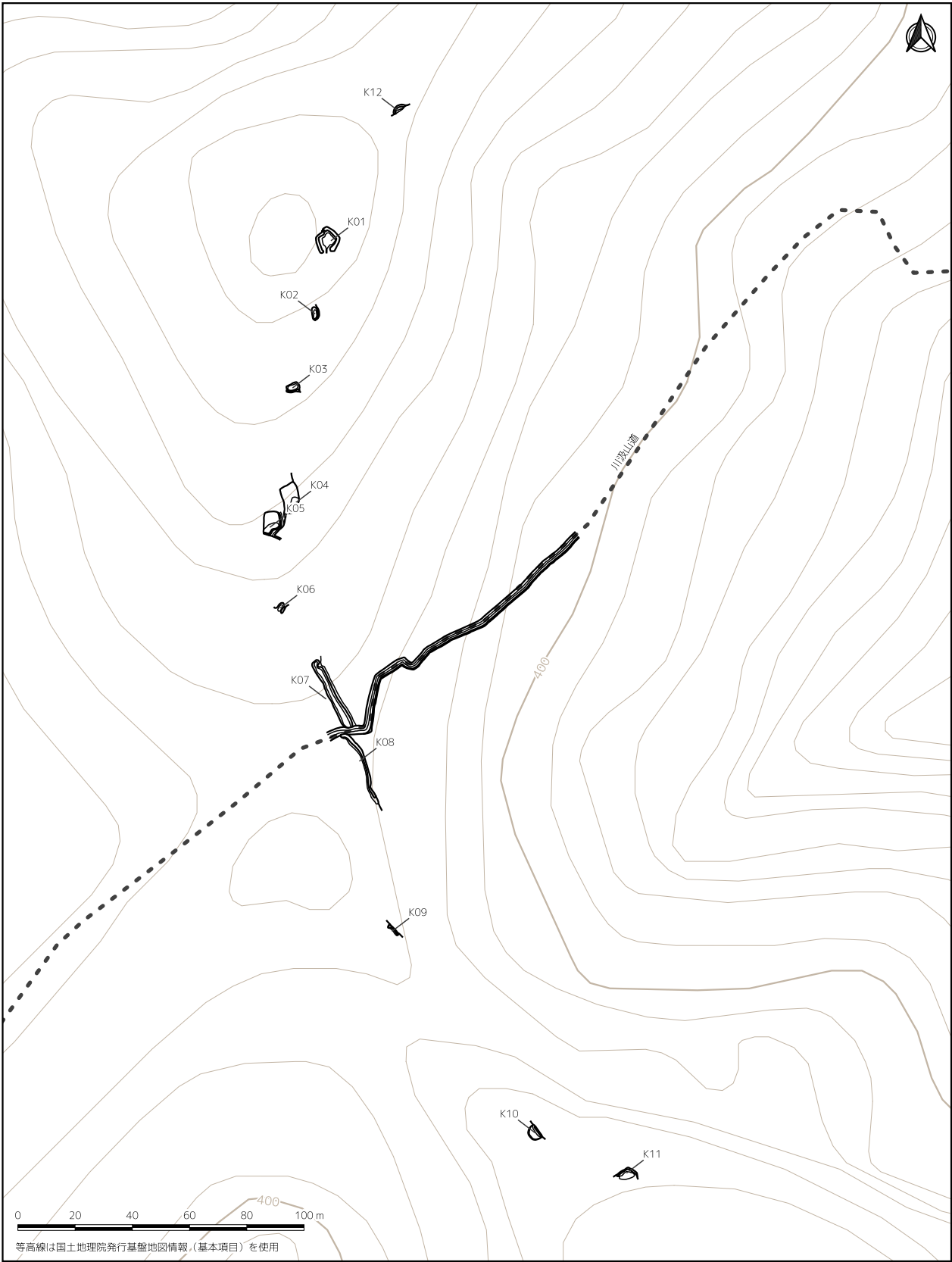


図 7 川汲台場検出塹壕位置図

(4) 可視領域による分析

台場山山頂塹壕（図 8 上）

K01 は台場山の山頂に位置し、川汲山道南北両側の尾根に視界が効く。川汲方面全体の眺望はこの塹壕がもっとも優れている。

川汲山道北側塹壕群（図 8 下）

川汲山道北側塹壕群（K02・K03・K04・K05・K06）は、川汲山道北側尾根線および南側尾根に対して視界を確保している。また、川汲山道南側には K09～K11 の 3 基の塹壕が配置されており、北側塹壕群はこれら南側塹壕群およびその北東斜面を視界に収めている。この塹壕群の主たる機能は、川汲山道南側塹壕群の北東斜面に対して側面から支援することであると推測される。

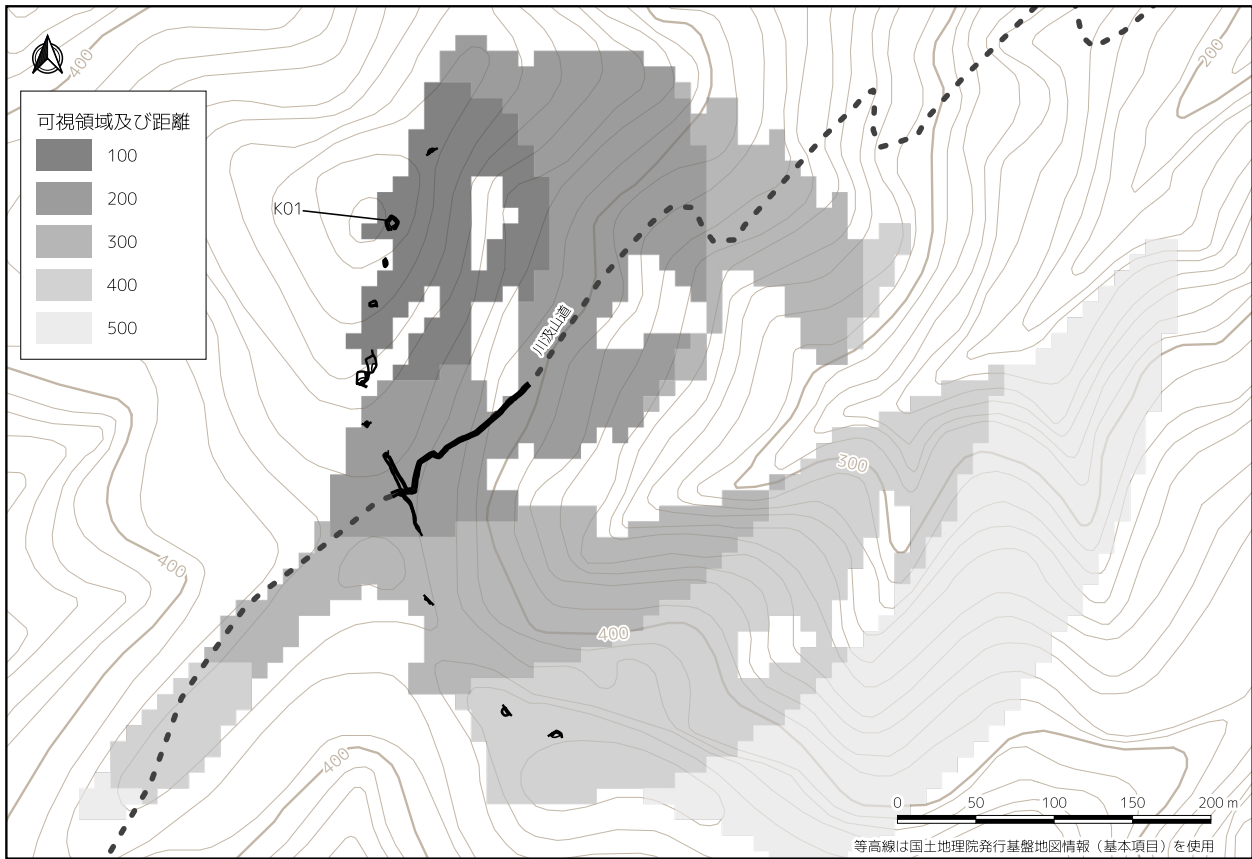
さらに、K03 および K05 においては、土塁の構築方向が南側、すなわち北側尾根のフォールライン方向となっており、川汲山道正面塹壕群（K07・K08）が突破された場合の第二線陣地としての機能も有していたと考えられる。

川汲山道正面塹壕群（図 9 上）

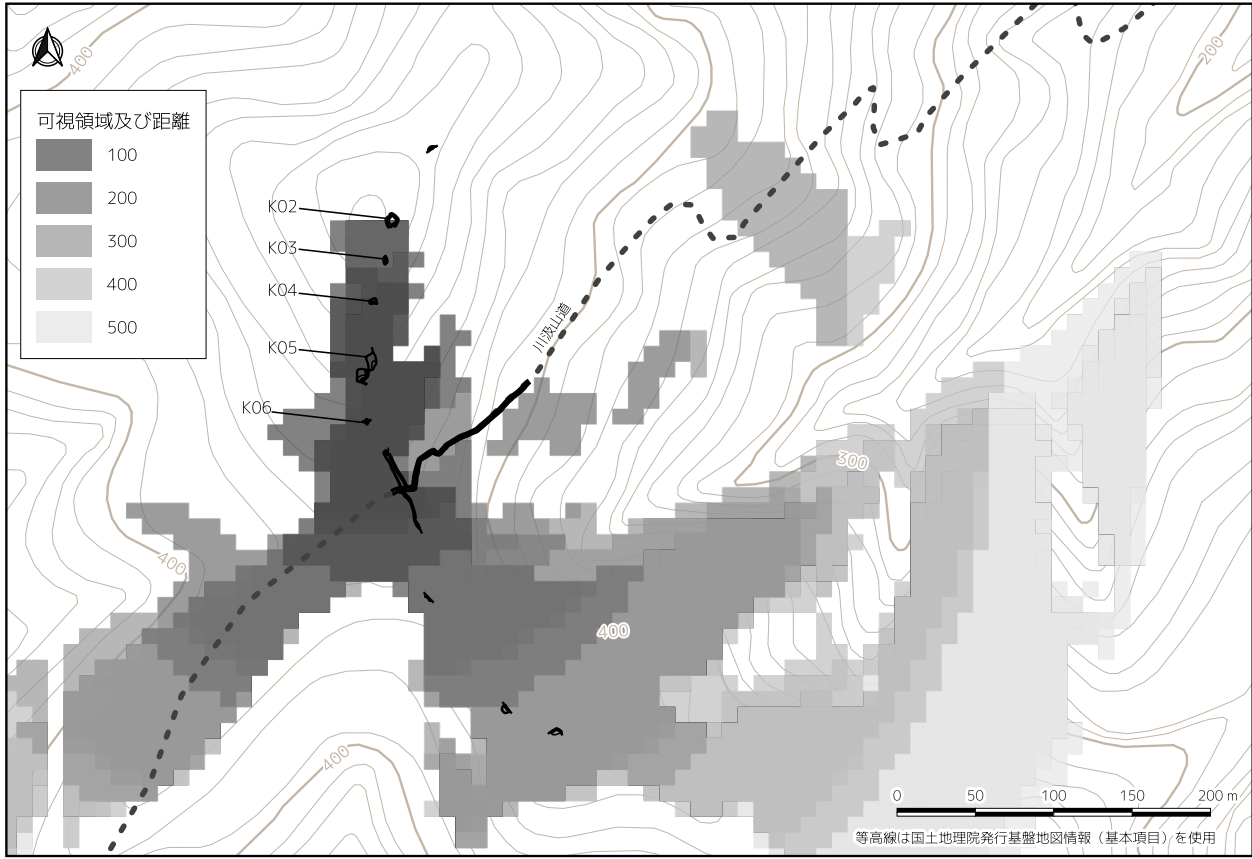
川汲山道正面塹壕群（K07・K08）は、川汲台場中最大の 2 本の塹壕によって構成されている。これらの塹壕は川汲山道を中心とした狭い範囲に視界を限定しており、川汲山道の正面防御が主たる機能であると推測される。また、北側尾根および南側尾根の東側にも視界を確保しており、川汲山道北側塹壕群や川汲山道南側塹壕群に対する側面射撃を可能としている。

川汲山道南側塹壕群（図 9 下）

川汲山道南側塹壕群（K09・K10・K11）は、川汲山道に対して広範囲に視界を確保している。この塹壕群は、主たる侵攻路である川汲山道を側面から射撃するだけでなく、川汲山道正面塹壕群および北側塹壕群への攻撃に対する側面射撃も期待されていたと推測される。川汲山道上の広範囲を射程に収めることが可能であり、距離 400m 圏内には川汲山道の延長約 360m が含まれている。

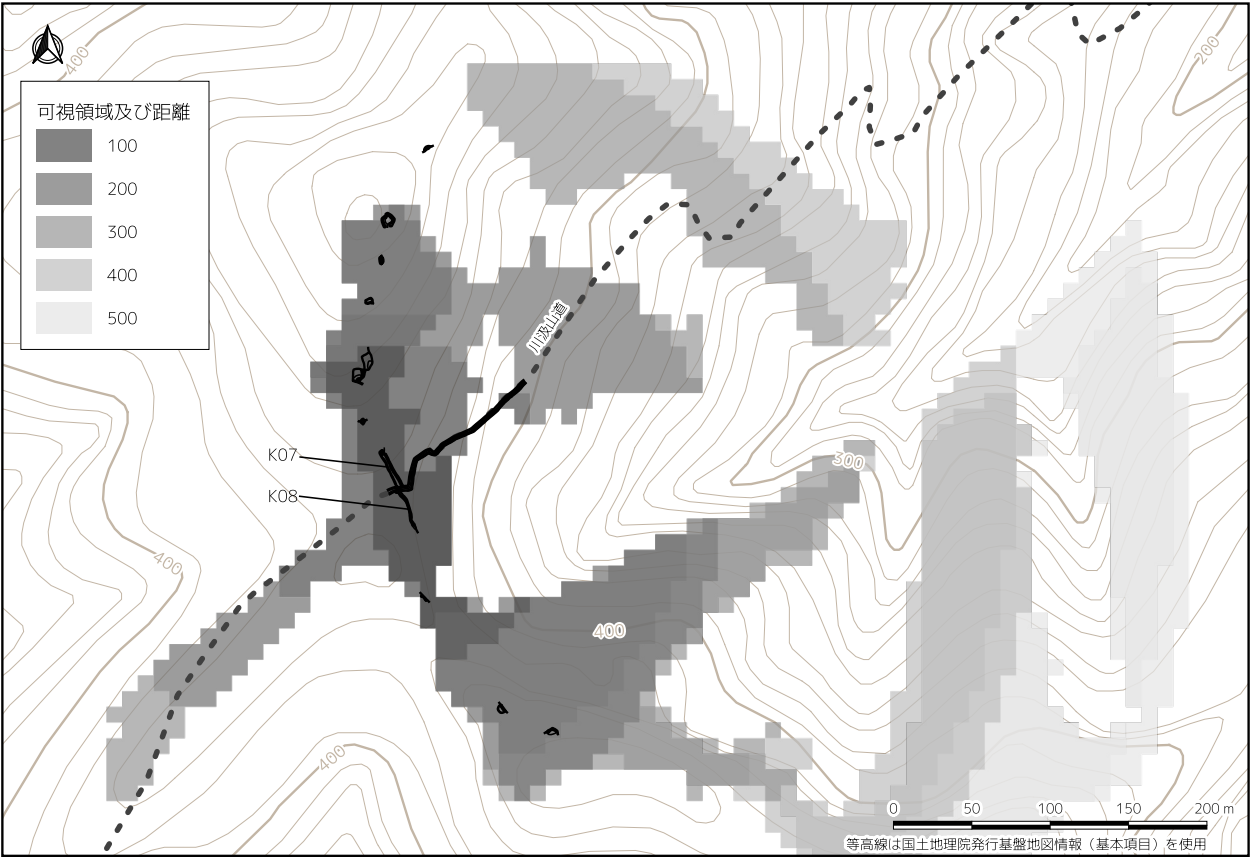


台場山山頂塹壕群可視領域（K01）



北側塹壕群可視領域（K02・K03・K04・K05・K06）

図8 川汲台塹壕群可視領域（1）



山道正面塹壕群可視領域（K07・K08）

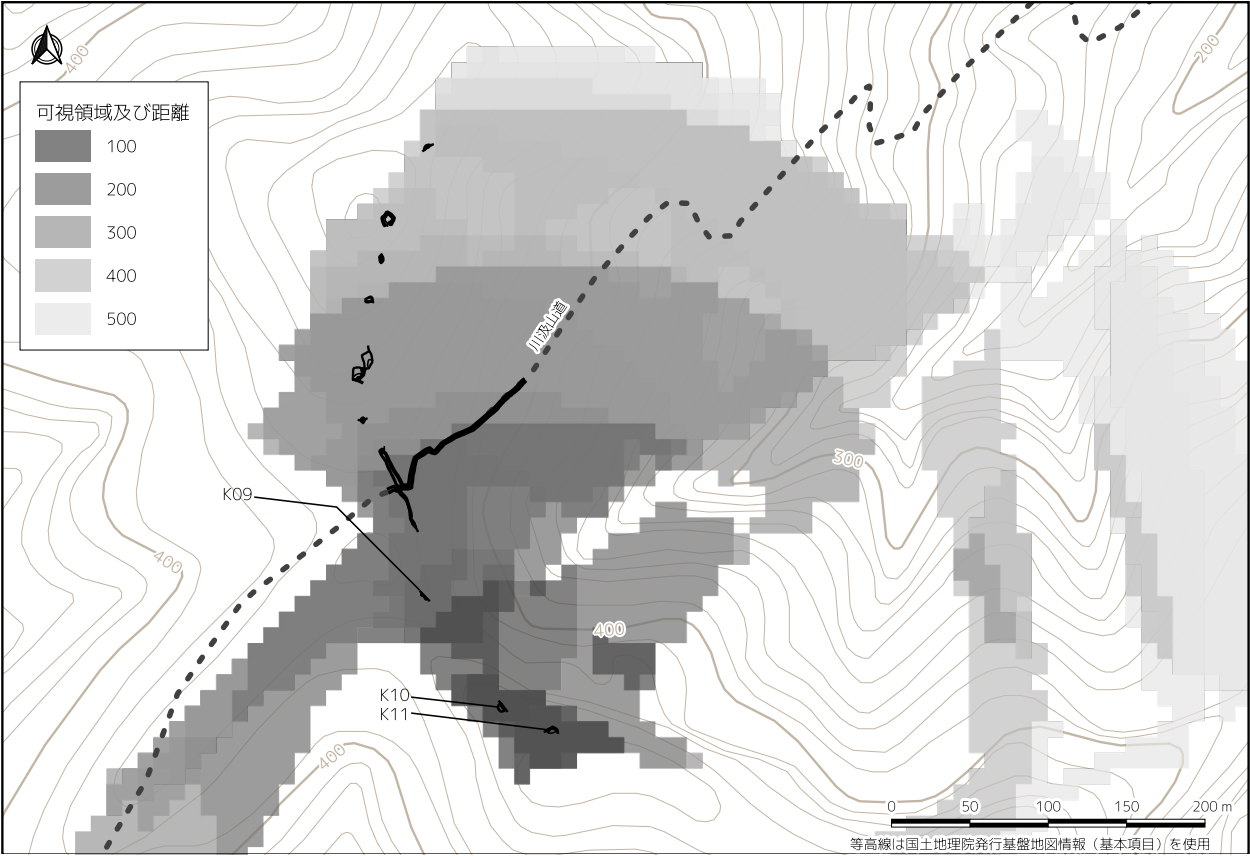


図9 川汲台塹壕群可視領域（2）

(5) 川汲台場まとめ

西南戦争において薩摩軍および官軍が構築した台場系の野戦構築物は、「弧状・弓状土塁の台場」、「長大な塹壕跡」、「稜堡系台場」の3つに分類される（高橋 2017: 148-152）。川汲台場において、K07 および K08 は「長大な塹壕跡」に該当し、それ以外の塹壕は「弧状・弓状土塁の台場」に分類されと考えられる（図 10）。また、台場山山頂の K01 は「稜堡系台場」に含まれる可能性がある。

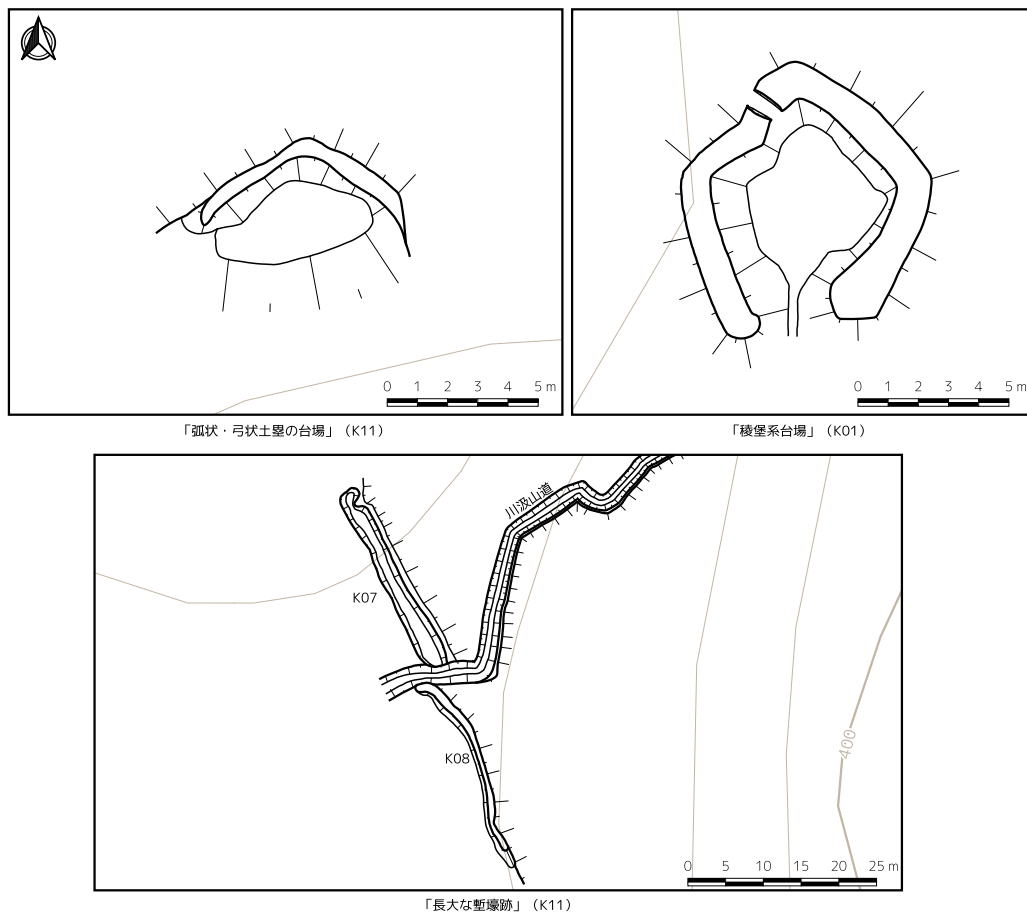


図 10 川汲台場塹壕類型

戊辰戦争および西南戦争を通じて最も多くみられる塹壕の類型は、「胸壁」と呼ばれる「弧状・弓状土塁の台場」であり、川汲台場の主要な塹壕もこの類型に属している。一方で、「長大な塹壕跡」の例としては、箱館戦争の戦跡である七飯町峠下土塁跡や二股台場の F01 が挙げられる。戊辰戦争においては、会津若松と白河を結ぶ馬入峠に位置する「要砦」が知られており（広長 2018）、旧道を遮断するように約 300m の塹壕が確認されている。川汲台場の K07 および K08 も、川汲山道を遮断する目的で「長大な塹壕」として構築されたと推測される。

「稜堡系台場」には、七稜郭として知られる七飯町峠下台場が含まれる（長川 1993; 八巻 2017; 石井 2022）。川汲台場の K01 がこの類型に属するかどうかについてはさらなる検討が必要であるが、西南戦争では、山頂

部や尾根の先端に築造される事例が多く見られる（大分県教育庁埋蔵文化財センター 2009; 高橋 2017）。したがって、K01 も「稜堡系台場」として整理すべきであると考えられる。

5. まとめ

(1) 箱館戦争における野戦築城の特徴

南北海道に残る 2 つの野戦築城遺構群について、塹壕配置と可視領域の分析を通じて、築城者の意図を明らかにしてきた。これら 2 つの野戦築城には以下の特徴がみられる。

1. 小規模な「胸壁」を基本単位として広範囲に配置し、必要に応じて「長大な塹壕」を組み合わせることで、全体の防御力を強化している。
2. 施条銃の高い命中率と長い射程距離を最大限に活用するため、遺構群は互いに支援し合う位置に配置されている。

これらの特徴は、散開戦闘を基礎にした兵力運用を反映しており、兵力を密集させることなく、少数の兵力で広範囲をカバーし、アウトレンジ攻撃や側面攻撃を可能にしている。瞬間的には新政府軍が 3 倍近い兵力を投入したにもかかわらず二股台場の攻略に失敗したのは、旧幕府軍がこのような施条銃の特性を活かした散開戦闘を巧みに行ったためであると考えられる。

(2) 山岳戦と施条銃

箱館戦争の主要な戦場は、いずれも山岳地帯に位置している。施条銃を装備した機動力のある軍隊の出現により、険しい山岳地帯は遮蔽物として有効活用され、攻撃側が相対的に有利な立場に立つことが可能となった（Engels 1857）。このような状況に対抗するため、箱館戦争における旧幕府軍は、防御性が低下する山岳地帯においても、施条銃の高い命中率と長い射程距離を活かした野戦築城の工夫を施し、防御戦闘を行った。川波台場は、戊辰戦争を通じて獲得された当時の軍事技術（藤井 2018）が具現化された遺構群であると結論付けることができる。

(3) 箱館戦争に従軍した人々

菊池勇夫（2022）が明らかにしたように、箱館戦争に従軍した旧幕府軍の多くは、百姓や町人といった身分の者たちで構成されていた。旧幕府軍の中核を成した幕府歩兵隊も、武家の奉公人であった江戸の都市民や近郊農村の住民が傭兵として編成された（保谷 2007: 32-33）。このような職業軍人ではない者たちが、散開戦闘のような高度な戦術に適応したことが、箱館戦争の大きな特徴の一つである。

従軍した人々の中には、明治元年の戦闘終了後に蝦夷地で徴用された者も含まれ、五稜郭で募集された兵士 140～150 名が訓練を受け、短期間で熟練兵に匹敵する技量に達したとの記述がある（大鳥 1998: 78-79）。真偽は不明だが、奥尻島から罪人を徴用して兵士としたとの証言も存在する（北海タイムス昭和 8 年連載『江差懐古座談会』）。これらの兵士に関して、五勝手村（現江差町）の古老は、旧幕府軍の兵士が住民に対して威圧的な行動をとり、最終的には刀を抜いて暴力を振るったとの証言を残している（厚沢部町史編纂委員会 1969:

492)。これらの兵士たちは「本当の侍ではなく、床屋（理髪師）などから徴用された者」と認識されていた（厚沢部町史編纂委員会 1969: 492）。現地募集兵がいたとの認識は『南柯紀行』の記述を裏付けるものである。

箱館戦争に限らず、幕府歩兵隊はその創設当初から暴徒化しやすい性質を持っており、大鳥圭介は創設時の伝習歩兵隊について「府下無頼の徒を募集した」と述べている（山崎 1914）。素性の良い者よりも「無頼の徒」が歓迎されたのである。このような者たちを、戦闘時には軍律で縛り、非戦闘時には給料で拘束していたのが旧幕府軍の実態である（野口 2002: 282）。こうした「無頼の徒」は、一方で勇敢な兵士として戦ったが、他方では北海道の住民に対して大きな混乱と恐怖をもたらした。箱館戦争の総合的理解には、野戦築城の痕跡とともに、そこで戦った人々のさらなる研究が必要である。

註

- 1) 可視領域の算出には GRASS GIS の「r.viewshed」コマンドを利用した。可視領域の算出起点は各塹壕下端の平面上の重心座標とし、可視領域算出の基準となる地上高は 1.75m とした。算出された可視領域をベクタ化し、汎用性の高いフォーマット（shape 形式）に出力した。

引用・参考文献

- 厚沢部町史編纂委員会 1969 『桜島-厚沢部町の歩み-』
 太政官編 1929 『復古記』第 14 冊 内外書籍
 Engels.F 1857 New York Daily Tribune 4912（秋山憲夫訳「昔と今の山岳戦」『マルクス = エンゲルス全集』12, 大月書店 106-112）
 藤井尚夫 2018 「稜堡式築城技術の輸入と実態」『中世城郭研究』32 228-236
 広長秀典 2018 「馬入峠要砦の「発見」」『中世城郭研究』32 52-62
 保谷徹 2007 『戊辰戦争（戦争の日本史）』18 吉川弘文館
 保谷徹 2013 「施条銃段階の軍事技術と戊辰戦争」『戊辰戦争の史料学』勉誠出版 61-87
 今井信郎 1998a 「蝦夷の夢」『南柯紀行・北国戦争概略衝鋒隊之記』新人物往来社 185-228
 今井信郎 1998b 「北国戦争概略衝鋒隊之記」『南柯紀行・北国戦争概略衝鋒隊之記』新人物往来社 159-184
 石井淳平・野村祐一・塚田直哉・時田太一郎 2020 「北斗市二股台場の測量調査—箱館戦争戦跡の考古学的調査「一」『北海道考古学』第 56 輯 35-54
 石井淳平 2022 「福島町茶屋峠台場及び七飯町峠下台場の調査」『北海道考古学情報』17 4-8
 維新戦歿者五十年祭事務所編 1917 『維新戦役実録談』維新戦歿者五十年祭事務所
 菊池勇夫 2022 「箱館降伏人とその人名簿-「歩卒」への関心-」『戊辰戦闘と東北・道南-地方・民衆の視座から-』芙蓉書房出版 253-311
 小林露竹編 1967 『北海道渡島南茅部町史年表』南茅部町教育委員会
 河野常吉 1924 『北海道史蹟名勝天然記念物調査』北海道立図書館所蔵 1974 年復刻版『北海道史蹟名勝天然記念物調査』名著出版
 毛利剛 2012 『二股口台場』自遊出版工房
 長川清悦 1993 「旧古峠台場発見と関連土塁 その歴史と意義について」『長川研究』6 1-8
 西山洋 2017 『北海道道南の陣屋と台場 [改訂版]』
 野口武彦 2002 『幕府歩兵隊』中公新書
 大分県教育庁埋蔵文化財センター 2009 『西南戦争戦跡分布調査報告書』（大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書:44）
 大鳥圭介 1998 「南柯紀行」『南柯紀行・北国戦争概略衝鋒隊之記』新人物往来社 7-158
 大山柏 1968 『戊辰役戦史（下）』時事通信社
 新人物往来社編 1995 『新選組史料集』新人物往来社
 須藤隆仙編 1996 『箱館戦争史料集』新人物往来社
 高橋信武 2017 『西南戦争の考古学的研究』吉川弘文館
 八巻孝夫 2017 「箱館戦争の台場—道南・東部と函館周辺の野戦築城を中心に」『中世城郭研究』31 102-126
 山崎有信 1914 『大鳥圭介伝』北文館